

自閉症スペクトラム障害の早期介入効果を親の目を通して検証する

Outcomes of early intervention for autism spectrum disorders: Parental perspectives

岩佐 光章¹⁾・本田 秀夫²⁾・清水 康夫³⁾・今井 美保⁴⁾

Iwasa Mitsuaki, Honda Hideo, Shimizu Yasuo, Imai Miho

1. はじめに

就学前の自閉症スペクトラム障害 (ASD) の子どもに対する早期介入は国内外で次第に裾野を広げつつある。早期介入の効果測定には通常、治療者による評価を用いるが、それ以外に「親の目」を評価者に据えた判定方法を想定することも可能である (図1)。しかし、これまでの早期介入プログラムの効果検証は治療者、あるいは治療者とは独立した評価者によってなされることが多かった。本研究では、ASDに対する早期介入の効果を親の目を通して検証する。

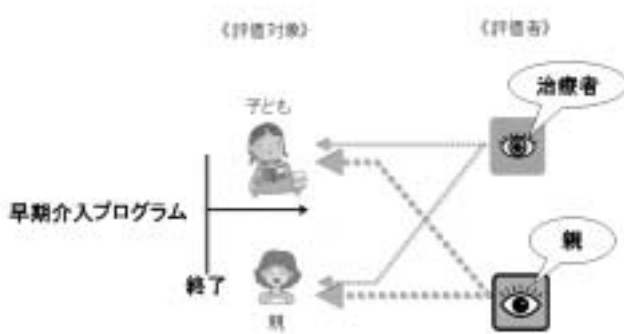


図1 早期介入の効果判定

2. 方法

調査対象は、当センターの知的障害児通園で早期介入を受け08年4月に就学したASDの子ども31名であった。調査対象全員が就学直前まで療育を受けていた。早期介入の期間は平均3年4ヵ月 (最短

が1年11ヵ月：23ヵ月、最長が4年2ヵ月：50ヵ月)であった。早期介入が終了した直後に、対象の子どもたちの親に対して「卒園にあたってのアンケート」を手渡し、記入したものを郵送にて回収した。調査対象31名中、28名から回答が得られ、回答率は90.3%であった。本研究の対象は、アンケートが回収された28名とした。診断は全員がASDであり内訳は小児自閉症が19名、その他のASDが9名であった。早期介入を開始する前の知能検査では、IQ70以上が7名、70未満が21名であった。

アンケートの中に、子どもの発達や行動に関する24の質問項目をもうけた (表1)。質問項目には、日常生活動作、認知発達、社会性の発達や集団行動、言語やコミュニケーションの発達、運動発達、遊びなどのカテゴリーをもうけた。親に24項目すべてについて「子どもの問題は改善したか、受けた療育には満足したか」をそれぞれ5段階評価してもらった。今回は、改善に関する回答に注目して調査した。

表1 アンケートの質問項目 (24項目)

ひとりで食事ができるようになった	ことばの発達をうながせた
偏食・小食・むら食いが改善した	コミュニケーションが改善した
靴の脱ぎ履きができるようになった	手指の発達をうながせた
ひとりで洋服の着脱ができるようになった	運動発達をうながせた
オムツがとれた	体力がついた
排便が自立した	親子で遊べるようになった
生活リズムが整った	遊びをわかった
全体の発達をうながせた	学習態度が身についた
認知発達をうながせた	集中力がついた
集団生活に適応できるようになった	感覚の過敏さが改善した
社会性が身についた	問題行動が減った
友達と遊べるようになった	生活リズムがきつらなくなった

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター 医療課 診療係
2) 横浜市総合リハビリテーションセンター 医療課長
3) 横浜市総合リハビリテーションセンター 副センター長
4) 横浜市総合リハビリテーションセンター 医療課 (非常勤医師)

3. 結果

まず、アンケート調査の結果から「心配率」を求めた。ここで「心配率」とは、「その項目については介入前から問題があった」と回答した割合のことを指す。心配率は、全項目が50%以上であり、半分以上の項目は実に90%以上を占めていた(図2)。

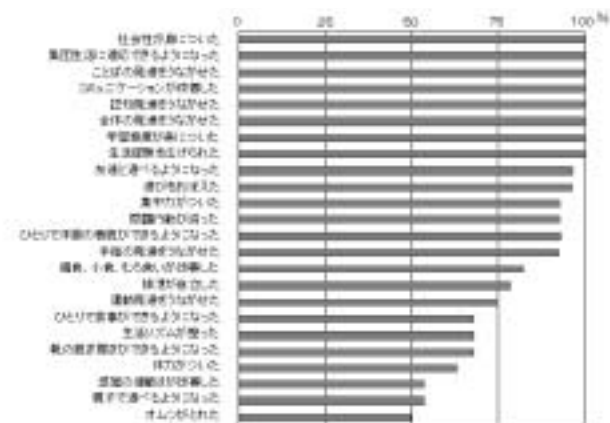


図2 各項目の「心配率」

その中で、「オムツがとれた」などADLや生活面に関連する項目は比較的心配されることが少なく、一方、認知発達や言語に関連するもの、社会性の発達や集団での行動に関連する項目は、全ての親が「心配があった」と回答した。

次に、「介入前からもともと問題があった」と回答した親に対して、各項目についてどれくらい改善したかを質問した。4分の3以上の親が大部分の項目について「改善」、または「やや改善」と回答した(図3)。

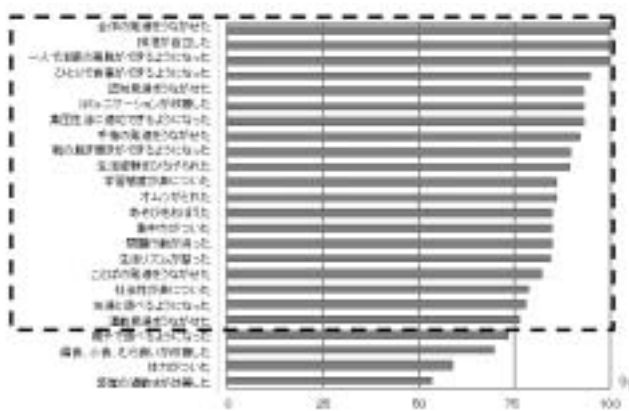


図3 各項目の「改善/やや改善」回答の割合

次に、さきほどのグラフから「やや改善」の回答

を除外して「改善した」と回答した割合のみに注目し、これを「改善率」と定義した。改善率の一覧をみると(図4)、改善率が高いものには「全体の発達をうながせた」、「認知発達をうながせた」といった項目があった。一方改善率が低いものには、「社会性が身についた」、「集中力がついた」、「問題行動が減った」、「体力がついた」、「感覚の過敏さが改善した」、「偏食、小食、むら食いが改善した」といった項目があった。このように7割近くの親が改善したと述べている項目もあれば、1割程度の親しか改善したと回答していない項目もあった。

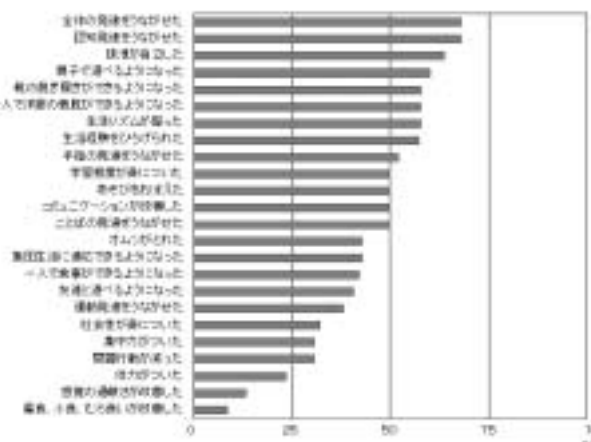


図4 各項目の「改善率」

心配率を横軸、改善率を縦軸にとり、24項目の散布図を描いてみると、各項目によってばらつきがみられた。そこで図5のように分割線を設けて散布図を分割した。改善率は50%で分割した。心配率は、質問票作成の段階で、心配をする人が多いだろうと予想される項目を選定しており、実際にすべての項目が50%以上であったため、分割線を75%とした。

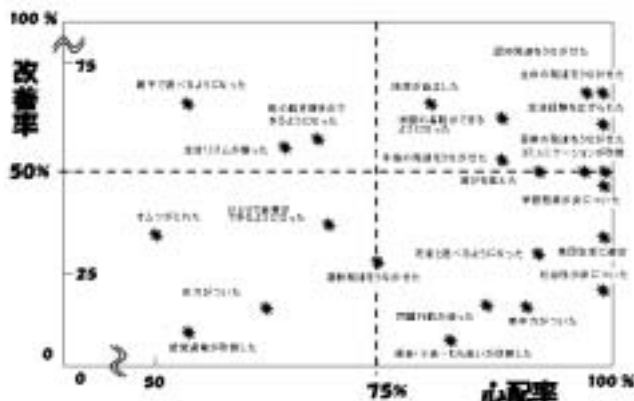


図5 「心配率」と「改善率」

心配率と改善率による散布図を3つのゾーンに分けた(図6)。Aゾーンは改善率が高いもので、これを「案ずるより産むがやすし」のゾーンとした。改善率が低く、心配率も低いものをBゾーン(「降ればどしゃぶり」ゾーン)とした。改善率が低いもののうち、心配率が高いものをCゾーン(「一筋縄ではいかない」ゾーン)とした。

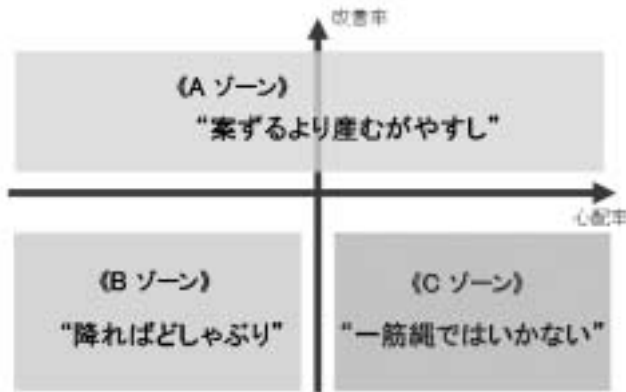


図6 3つのゾーン

Aゾーンに含まれる項目には、全体の発達をうながせた、認知発達をうながせた他、ADLに関する9項目が含まれていた。Bゾーンに含まれる項目には、感覚過敏が改善した、体力がついたなど4項目あった。Cゾーンに含まれる項目は、社会性が身についた、集団生活に適應できるようになった、友だちと遊べるようになった、など6項目あった。また、卒園時点のIQが70以上の群13名についてみると(図7)、社会性やコミュニケーションの発達のほか、集中力や問題行動といった項目は知能が比較的高い群でも改善が難しかった。また、感覚過敏の問題などはIQが70以上の群でも「降ればどしゃぶり」パターンであり、心配がある場合にはなかなか

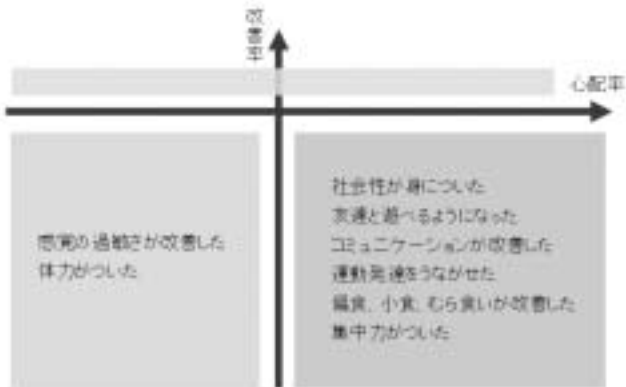


図7 IQ70以上の群

改善しない項目であった。今回の調査ではIQが高い群の人数が少ないという限界はあるものの、ASDの場合これらの項目は知能水準とはあまり関係ないことが示唆された。

次に、治療者側による評価のうち、知能検査の結果についてのみ示した。早期介入の前後で知能指数の変化を比較すると、全体的に右肩あがりの結果となった(図8)。自閉症では4歳と5歳のIQはその後も安定し、3歳より前の知能検査の結果は不安定なことがいわれている。介入前の知能検査を4歳0ヵ月以降に行っており、かつ介入前後の知能検査が測定可能であった13名について早期介入前後でのIQの比較をするため、対応のあるサンプルのT検定を行ったところ、1%水準で早期介入終了時に有意なIQの上昇が認められた。

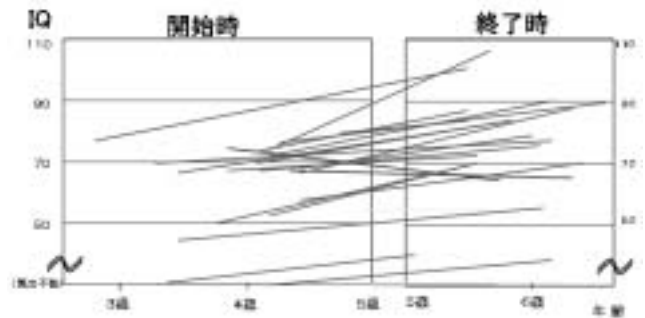


図8 早期介入の前後でIQを比較

4.まとめ

親の目からみて、早期介入をうけたASD幼児はどの項目も総じて改善した。「心配率」と「改善率」の関係から、各項目は3つのパターンに分類され、幼児期のうちに改善する項目、幼児期のうちに改善しにくい項目があった。特に社会性やコミュニケーションの発達に関する項目はIQの水準にかかわらず幼児期のうちに改善しにくかった。

今回の研究ではコントロール群を設定していないため、この改善に早期介入の効果がどれだけ関与しているのかを特定することは困難である。ただし、幼児期に改善する発達・行動が比較的多くある一方で、密な早期介入をうけていてもなかなか改善しないものもあることが示唆された。治療の方針としては、幼児期に改善するものは定期的なフォローアップを行い、幼児期になかなか改善しなかったものは

学齢期も引き続き介入を継続すると共に、教育との連携にいかにつなげていくかが重要である。また ASDの場合、幼児期にはまだ顕在化していない発達・行動上の問題が、学齢期に初めて出現することがあるかもしれない。今後、主に発達心理学や精神病理学の観点からその出現をできるだけ予測し、タイムリーな介入へつなげていく治療戦略をより体系化していきたいと考えている。

〔第49回日本児童青年精神医学会総会
(2008年11月5日～7日、広島市)にて発表〕

参考文献

Lovaass O.I : Behavioral Treatment and Normal Educational and Intellectual Functioning in Young Autistic Children. Journal of Consulting and Clinical Psychology 55(1): 3-9, 1987

Smith T, Groen A.D, Wynn J.W : Randomized Trial of Intensive Early Intervention for Children with Pervasive Developmental Disorder. Am Journal on Mental Retardation 105 (4): 269-85, 2000

Ozonoff S, Cathcart K : Effectiveness of a Home Program Intervention for Young Children with Autism. Journal of Autism and Developmental Disorders 28 (1): 25-32 , 1998.